藤屋 侃士
（下松市幸ケ丘）

老いる中で

～エメラルド婚～

結婚55周年をエメラルド婚と言うことは、前回書いた。

子ども部屋として使っていた2階の階段を登るとき、両側に手摺（てすり）をつけても息苦しい。老いとは喜ばしいことはなく寂しいことが多い。

55回の結婚記念、先日結婚式を挙げた徳山カトリック教会を訪れた。教会正面のドアには、5月26日までコロナウイルスのため、ミサは休みとあった。それ以外結婚した当時とほとんど何も変わっていない。しかし自分たちは色々と変わり、一番の変化は体力が衰えたことだ。

聖堂内正面上のキリスト像を見ながら、自分はこれから何年生きられるだろうと考えた。誰も避けては通れない道ではあるが…。

今、毎週2回デイ・サービスに行く。80人前後の人を見ながら、日本は高齢化社会だと実感する。そして生きることの喜びよりも苦しさ、寂しさを感じる。

このデイ・サービスで働く人たちを見て、感謝の気持ちで一杯になる。嫌な顔ひとつしないで、体の不自由な人々の手助けをする。仕事とはいえ清々しささえ感じる。

我々は人を評価するのにその人の給料、家柄、学歴などで比較するが、この人たちにはそんなものは全く感じない。

性格は異にするが、私に清々しい生き方を教えてくれたのはキリスト教との出会いだ。その中で山口市仁保の観想修道会カルメルを知る。

生涯を神に捧げて祈りの中で労働の日々を生涯ささげる。これらの行為は沈黙の中で行われる。最近やっとその生涯の中に真理があると思い始めた。こういう思いを持てるようになったのも老いの表れかもしれない。

老いといえば、私は悪い面ばかりを感じていたが、80歳を超えた今、明るい面があることに気づかされる。今までになかったことだ。老いの中の心のゆとりとでも言える。こう考えると、老いもまた楽しい。

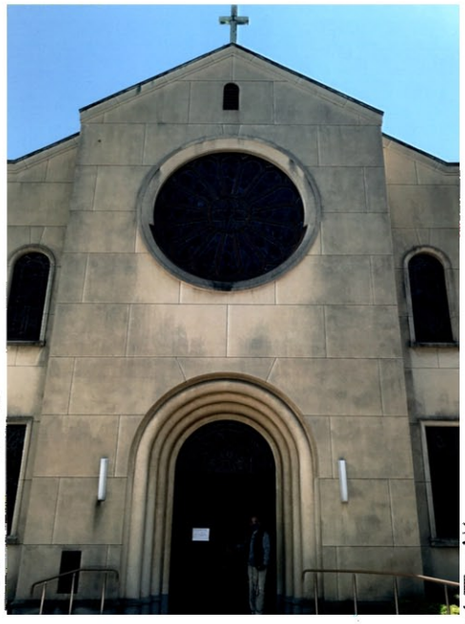
そしてそんな気持ちになると不思議に友人が訪ねてくれる。足が不自由になり自由に歩けない私たちには、有難い人との交わりを与えてくれる。このように友人との交わりの中で老いを生きれることはエメラルド婚の特徴かもしれない。そして今までは喜びとか輝きという言葉にあこがれを持っていたが、これらは平凡な生活の中にあると思い始める。

前の山では鶯にかわって山鳩が鳴く。

時は移りゆく。与えられたときを大切に生きようと思う毎日である。

この教会での初めての仲人

聖堂内部


徳山カトリック教会

山口仁保カルメル会